長宗我部信親

ちやうそかべのぶちか

森林太郎作

長宗我部信親

森林太郎作

株式會社 國光社

長宗我部信親

上戸次川

頃は天正十四年
しはす十二日の朝まだき、
筑紫のはても冬闌けて、
靈山おろし吹きすさむ
戸次の川の岸ちかく、
仙石權兵衞ノ尉が家の子
三好田宮が率ゐたる

一千餘騎の　つはものども
先を爭ひ　押し寄せたり。
岸のあなたに　控へたる
島津修理ノ太夫　義久は
二萬騎あまりに　將として、
去ぬる九月の　ころほひより
大友勢を　駈け惱まし、
しきりに勝に　乘じつつ、
上方よりの　後詰たる
太閤恩顧の　長宗我部

仙石とやらん　疾く來よかし、
目にもの見せて　くれんずと、
用意おろそか　ならざりけり。
かかればけふの　戰は
門出の砌　太閤が
わが大軍の　至らんまで
ゆめゆめ卒爾の　いくさすなと
戒め給ひし　旨に乖けり。
しかのみならず　向ひなる
岸邊は木立　連なりて、

伏兵あらんも　計られず。
川を渡らば　渡り來る
なかばを擊ててふ　兵法の
をしへを知らぬ　敵ならず。
さすが思慮ある　長宗我部は
軍議の席に　仙石を
しきりに諫め　たりしかど、
無謀の仙石　聲勵まし、
心おくれし　土佐武士ども
攻めじとならば、　我ひとり

手勢を以て　攻めんずと
うけひかざれば、　長宗我部も
是非なくいくさを　出だしけり。
さる程に三好　田宮等が
馬を揃へて　眞ッ先に
川のなかばに　騎り入るよと
思ふ間あらせず、　向ひなる
木立のうちより　つるべかけ
打ち出だす玉の　雨霰に
十五六騎の　つはものは

打たれて水にぞ　沈みける。
あなや敵には　伏兵あり、
引けやと叫ぶ　聲と共に、
馬に鞭うち　引き返す。
その時嶋津の　先手なる
伊集院右衞門が　五千餘騎
竹中ノ小瀬を　打ち渡り、
驚き騷ぐ　仙石が
本陣目がけて　切り入つたり。
續いて大將　嶋津修理

八千餘騎の　旗もともて
勢たけく　攻めかかれば、
仙石勢と　並び進みし
大友左兵衞が　手のものども
一たまりも　たまりえで、
龍王が城を　こころざし
われ先にとぞ　逃れける。
仙石勢は　程遠き
豊前ノ國なる　小倉まで
夢路をたどる　心地して

ひた走りにこそ　馳せ去りけれ。
そも長宗我部　信親は
身のたけ六尺　一寸ありて、
いとおとなびては　見えけれども、
年まだ二十　二歳にて
こたびの後詰に　えらばれしを、
父元親は　故郷にて
聞くより心　やすからず、
西の空のみ　打ち眺め
はるばる物を　おもはんより、

我子の陣に　赴きて、
うしろ見せばやと　決定し、
去ぬる霜月の　末つかた
舟路をいそぎ　渡り來ぬ。
かかればけふの　いくさには
親子鑣を　並べつつ、
仙石勢の　敗るるをば
かねて期したる　事なれば、
手勢三千を　引きしめて
脇津留村の　片ほとりに

わざとさがりて　陣を取り、
鳩酢草の　紋附きたる
旗一ながれ　押し立てて、
しづまりかへつて　控へたり。
その時島津が　二陣なる
新納武藏ノ守　忠元は
これも精兵　三千騎を
一手にまとめて　馳せ向ひ、
心猛いと敵の　擧動よな、
逃げ行く味方に　目もくれで

待ち受けたるこそ　しほらしけれ、
薩摩隼人の　鋒を
受けても見よやと　まッしくらに
討つてかかれば、　わたりあひ
新納が手のもの　二百人
またたく隙に　討ち取りぬ。
流石にたけき　薩摩勢も
しばしためらふ　その隙に、
元親親子は　山崎の
岬の方へ　落ちて行く。

新納ふたたび　追ひすがれば、
こなたも同じく　引きかへし
しのぎを削る　折しもあれ、
嶋津修理が　三ノ陣
本多主税が　二千の兵
佐古の口より　まはり來て
親子が陣の　横合より
鋒鋭く　切り込んだり。
味方は左右に　敵を受け
二手にわかれて　戰ふうち、

父元親は　料らずも
我子の影を　見うしなひ
且戰ひ　且退きつ。
信親は又　舅なる
石谷兵部を　始とし
吉良細川等と　もろ共に
二十餘丁を　引き退き、
中津留川原に　疎なる
士卒をまとめて　折敷かせ、
追ひ來る敵を　待たんとす。

その時桑名　太郎左衛門
主の馬前に　跪き、
戰もはや　これ迄なり、
父上待たせ　給ふらん、
おん供せんとぞ　ヤける。
信親答へて　いひけるやう。
味方は多く　討たせつれど、
此塲を切り拔け　逃れんこと
さほど難くは　よもあらじ。
されどもけふの　戰は、

仙石殿の　指圖ながら、
太閤殿下の　御旨には
初よりして　背きたり。
縱ひ軍議の　むしろにて
諫めとどめし　ことありとも、
かく見苦しき　敗北を
いかにしてヤ　解くべきぞ。
生き存へて　父上に
仕へんとおもふ　物共は
こころを置かで　落ち延びよ。

われは此塲を　去らずして
討死せんとぞ　ヤける。
石谷はじめ　古つはもの等、
げにいしくも　宣給ひしよ、
承れば　もののふの
本意はさこそ　いはめ、
物數ならねど　某等も
死出のおん供　仕らんと
詞涼しく　いらへつつ、
敵追ひ來べき　道筋を

睨まへてこそ　立つたりけれ。

中　中津留川原

嶋津が二陣を　率ゐたる
新納武藏ノ守　忠元は
塲數を積みし　つはものにて、
打痍槍痍　七十餘箇處、
世におぼえある　ものなるに、
はからずけふの　戰に
郎黨あまた　討たせたる
むくいをせでや　あるべきと

落ち行く敵を　追ひ慕ひ、
中津留川原に　近づきぬ。
待ち設けたる　土佐勢は
追ひ來る敵を　きつと見て、
さては新納は　わが方に
みづから向ふと　おぼえたり、
敵に取りては　不足なし、
最期のいくさは　今ぞとて
主從たがひに　はげましあひ、
百騎に足らぬ　殘兵も

死を決しては　わろびれず、
目に餘る敵を　引き受けて
ここをせんどと　戰うたり。
中にも大將　信親は
唐綾縅の　甲を着、
蛇皮の冑を　戴きて
馬を縱横に　馳せめぐらし、
四尺三寸の　長刀を
閃く稻妻　石擊つ火と
見まがふ迄に　打ち揮ひ、

敵八人を　切り伏せつ。
乗りたる愛馬　内記黒も
數箇處のいたでに　倒れければ、
徒立となり、　長刀棄て、
太刀抜き放つて　戰ひぬ。
そも此太刀は　信親が
元服のをり　引出物に
總見院殿の　賜はりし
二尺七寸の　左文字なるを、
けふしもおもふ　よしありて

日ごろ佩きたる　兼光の
太刀に代へてぞ　帶びたりける。
刄はわざ物　手は冴えたり、
向ふに前なき　ありさまを、
新納元忠　きつと見て、
あれこそ敵の　大將ならめ、
いで打ち取らんと　馳せ寄れば、
郎黨どもは　押し隔て、
主に代りて　死なんとす。
信親は又　敵六人

またたくひまに　討ち取りぬ。
近寄るものの　なきを見て
腹掻き切らんと　するところに
島津がたの　軍奉行
鈴木大膳　馳せ來り、
おん大將に　見參と、
隙間もなくぞ　切りかくる。
信親につこと　打ち笑みて、
殊勝の敵よ、　土佐武士の
最期を見よと　わたりあひ、

思ふ儘に　太刀打して、
二十二歳を　一期とし、
地にもたまらぬ　暖國の
雪より先きに　消えにけり。
郎黨石谷　本山等は
主に先だち　はや討たれぬ。
細川源左は　けなげにも
大將新納と　槍を合せ、
敵のゆん手を　突き破り、
槍をからりと　おとさせしが、

主の危急に　馳せつけし
伊勢兵部にぞ　討たれける。
その外名ある　家の子等
三十餘人を　始とし、
物數ならぬ　雜兵まで
ひとりも殘らず　討死して、
中津留川原の　石原を
韓紅に　染めなしゝは
あはれなりける　事どもなり。

下　日振ノ島

宮内ノ少輔　元親は、
我子の上の　氣遣はしく、
新納が一手の　ものどもに
追はれながらも、　幾度か
引き返しては　槍を合せ、
わざと時刻を　移しつつ
一歩一歩と　退きて、
後詰の爲めに　さいつ頃、
新　繩張をしたりける
上原の　城郭に

一まづ手勢を　繰り入れて、
胸安からぬ　夜をあかしつ。
翌十三日の　曉に
物見のものを　出だし遣り、
軍のあとを　たづぬれば、
中津留川原の　血戰に
子息信親　主從が
一騎ものこらず　死せしこと
もはやかくれは　なかりけり。
あはれなるかな、　元親は

五十路に近き　老の身の
君命あるにも　あらずして
九州の地に　押し渡り、
戈を枕に　陣營の
霜夜の夢を　結びあへず
明し暮すも　信親が
上を氣遣ふ　ゆゑなりしに、
きのふひと日の　戰に
屍を曝しし　味方の兵
七百人の　その中に

わが愛子をさへ　數へんとは
思ひがけなき　事かなと
不覺の涙に　暮れにけり。
されども流石　名を惜む
大將なれば　この儘に
ふるさと土佐へ　歸らんこと
おもぶせなりとや　おもひけん、
討ち殘されし　家の子を
數艘の舟に　分ち載せ、
伊豫の岸より　遠からぬ

日振ノ島にぞ　退きける。
元親島に　いたり着き、
谷忠兵衞ノ尉　忠澄を
假屋に召して　ひけるやう。
汝が主は　年老いて
心つたなく　なりたるぞ。
おくれ先だつ　世の習は
今更の事　ならねども、
中津留川原に　討死せし
子息信親が　上こそは

未錬ながらも　忘られね。
せめては亡骸　のみなりとも
迎へ取らんと　おもふなり。
汝はいまより　使者として、
さいはいこたびも　在陣せる
惠日寺もろとも、　豐後なる
島津が陣に　赴きて
事の次第を　聞えよと、
面をそむけて　いひつけたり。
忠澄返さん　詞もなく

舟路をいそぎ　惠日寺と
島津がもとに　渡りゆき、
しかじかとこそ　傳へけれ。
義久聞いて　涙を流し、
げに尤なる　仰よな、
御使なくとも　こなたより
送りとどけ　まゐらすべきを、
事のまぎれに　怠りしは
面目なくこそ　いへと、
人して使者を　信親が

遺骸のところに　案内させつ。
忠澄惠日寺　兩人は、
年頃親み　まゐらせし
これが若殿　なりけるよと、
一目見るより　はふり落つる
涙の雨を　せきかねて、
霞のおくに　さく花の
色みえわかぬ　おもひせり。
しばらくありて　惠日寺は
涙を拂ひて　ヤすやう。

いかに谷殿　聞き給へ。
近頃館の　おんさまを
つらつら伺ひ　奉るに、
愛子におくれ　給ひしより、
恩愛の絆に　まつはられ
煩惱の闇に　迷ひ給ひて
寢食をだに　安んぜられず。
今若しわれ等、若殿の
生けるが如き　おん骸の
おん供ヤて　歸りなば、

館の迷を　増すのみにて、
御國の爲め　臣下の爲め
臍を噬む悔　なからずやは。
たとひ一時の　おん怒に
御勘氣うくる　ことありとも、
ここにて茶毗し　まゐらせて、
御遺骨をば　首に掛け
歸らんとこそ　おもひしへ。
御思案いかにと　ゆければ、
忠澄げにもと　うけがひて

おん亡骸を　とり斂め、
茶毗所に舁かせ　行きにけり。
さて焚燒に　さきだちて、
おん柩をば　一間に据ゑ、
香華を供養し　まゐらせつ。
威儀おごそかに　惠日寺は
拂子を揮ひて　立ち向ひ、
喝聲　叱ニ窮鬼一
赤脚　走ニ刀山一
好通ニ　一線路一

脱却　三界の闘と
聲高らかに引導し、
紅顔緑鬢　痕も無く、
烟とこそは　なしたりける。
壺にをさめし　遺骨に
天甫常舜　居士といふ
一紙の戒名を　取り添へて、
日振ノ嶋に　持ち歸る
僧俗二人の　使者と共に、
島津とぶらひの　つかひを遣れば、

これを聞きたる　新納さへ
いと懇に　消息して、
最期のいくさに　信親が
身に着けたりし　かたみなる
甲冑を　おくりけり。
異國のむかし　TROJAにて
愛子HECTORが　屍を
敵の陣所に　乞ひ得たる
PRIAMOS王が　恨にも
まさる恨は　日振なる

假屋の軒に　元親が
最愛の子の　亡骸を
あだに待ちける　恨なり。

明治三十六年九月十日印刷
明治三十六年九月十五日發行

定價十錢
郵稅二錢

著者　東京市本郷區駒込千駄木町二十一番地　森林太郎
發行所　東京市京橋區築地二丁目廿一番地　株式會社國光社　電話新橋特八八、二六九三番
發行者　右代表者　橋本忠次郎
印刷者　東京市京橋區築地二丁目二十番地　河本龜之助
賣捌所　東京本郷區春木町國光書房、大阪心齋橋通國光社出張所、其他全國各書店

著作權所有

東京築地國光社印刷